

---

# 陽菜の一日

KI RARA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陽菜の一日

### 【Nコード】

N0945Z

### 【作者名】

KI RARA

### 【あらすじ】

26歳OL一人暮らし。

「恋愛はもういい」と言いながらも、恋愛と無縁では生きられない陽菜のこれからは、一体どこへ向かうのか。  
ストーリーのないまま進む物語。

12月2日 金曜日

定時で仕事を終わり、一人の家に帰った陽菜は、荷物を置き、床の上に敷きっぱなしになっていた来客用の布団の上に倒れこんだ。

寝不足で、仕事中也たびたび危なかった。

(今日これから飲み会かあ。めんどくさいな)

金曜日の夜。

以前同じ人に誘われて行った飲み会も当たりだった。今回も期待していいはずだ。

彼氏のいないOLとしては、気合いを入れて行くべき合コン。

しかし今の陽菜は、乗り気にはなれなかった。

(それよりも)

こうして布団に顔をうずめていると、今朝ここにいた男の手の感触を思い出してしまう。

その手がどんな風に腰に触れ、肌の上をさ迷ったか。頬をくっつけ合い、両腕にすっぽりと包まれて、自分よりも少し高い体温をどう感じていたか。

匂いが残っていないかと、鼻をひくつかせるが、彼の男性らしい匂いはかけらも残っていなかった。今朝は匂いが残りませんように思っていたのに、今はそれを残念に思ってしまう。

(いけないいけない。切ろうって決めたのに)

正確には、今すぐ切れるわけではない。

陽菜は首を反対方向に向けて、置いてある男物のジーンズを見た。

(少なくとも、あれを返さなきゃいけないし)

2週間前に置いて行った服が部屋の隅で存在感を放っている。

男と陽菜の付き合いは、意外と長い。

一年半前、女友達が「あ、男の子呼んだから」と当日になって合流した男と、その日のうちにそういう関係になり、それ以来ずっと疎遠だったのが、ここ半年で再び連絡を取り始めた。

恋愛をする気がすっかり失せていた頃だったので、

(メールくらいなら)

と軽い気持ちで連絡を取っていたが、1カ月前、やはり再びこういう関係に戻ってしまったのだった。それまで毎日していたメールは、がくんと頻度が減った。

はあ、とため息をついて、陽菜は布団から身体を引き離れた。

気が強くそうに見える少し濃いめのアイラインと、ジャラジャラしたピアス、それにヒョウ柄のポイントの入ったセーターにジーンズで、さっそうとヒールの音を響かせながら、マンションの廊下を歩いた。

今年に入ってから、出会いがどうこうよりも、ナルシズムに浸るために出歩いているようなものだ。

今まで出来なかつたファッションで出かけるのが楽しくて仕方がない。そしてそれを褒められるのも快感になっている。

結果、合コンは楽しかった。

職種は堅実で、しかし適度に遊んでいそうな男たちだった。男に関心を寄せられて、自分も相手に関心を持って、話は楽しかった。

去年1年間の恋愛のもろもろで、相手の行動や言葉の端々から真意を読み取るうという無駄な努力をしなくなった。異性の気持ちなど、永遠に分からないものなんだと割り切ると、心が自由になり、話すのが楽しくなった。楽しくなると、相手も楽しんでくれる。

(アイロニーだわ)

同じように、好きじゃない相手に好かれて、好きな相手に好かれないうということとはよくある。諦めた途端に向こうから連絡があることも。

今朝マンションで別れてからメールを寄越さない男はどうだろうか。気が付くと携帯を気にしている自分がある。

(帰りに彼の家に寄ってっっちゃおうか)

しかし、こちらからメールをするのは癪だ。あんまり追いかけて、相手を慢心させてもいけない。メールが来なくて焦ってくれればいいと思う。

誘惑に耐え、陽菜は大人しく家に帰ったのだった。

この我慢も、アイロニーなのだろうか。

12月2日 金曜日(後書き)

読んでくださってありがとうございます。一日一更新を目指します。<http://kirara-shosetsu.com>でも同時掲載していますので、よろしくお願いします。

12月3日 土曜日

風邪を引いてしまつて…すみませんが、今日は行けそうにありません。

陽菜は布団に横になりながら、携帯電話のメール送信ボタンを押した。昨夜は飲み会から帰ってきてすぐに、来客用の布団で寝てしまった。昨日の朝から落としていないメイクでまぶたが重い。肌は乾燥し、頬の辺りがアトピー肌のように乾燥している。

(今日は一日、家から出たくないな)

そんな気分のまま、ランチデートの約束をキャンセルした。

すぐに相手から「いいよ」という返信が来た。

(いい人なんだよね)

今回会つていれば、デートは3回目になる。日本人ならば知らない人がいないほどの偏差値の高い国立大を卒業し、堅実かつ高収入の仕事に就いている。

良くも悪くも、遊んでいなさそうな人。それが彼の印象だった。

陽菜の方は、彼よりはかなり下の大学になるものの、彼女が住んでいる地域では一番の大学を出ている。地元の高コンで出身大学を言うが決まつて「すげえ！頭いい」と言う男たちの、ちよつと引いた態度にうんざりしてただけに、地元で自分よりも高学歴な人間と出会う機会を無駄にしたくはないと思う。

(なのは何でだろ)

なぜ、自分はワンルームのマンションで一人ネットマンガや小説を読んでいる方を選んでしまうんだろう。

そもそも陽菜は「平成23年は恋愛をしない年」と決めていて、実際、恋愛する気もなかったはずだ。

友達が結婚を意識し始め、さみしさはある。しかし、自分は自分と習いごとを始めたり「もっと楽しいことはないか」と今まで興味はあってもしなかったことに挑戦したりした。新しい自分にどんどん気づいて、とても充実していた。

誰がどう思つかを気にしていなかったからこそ出来たことだ。恋愛をしていたら、きつと「失敗してもいい」と思い切ることは出来なかっただろう。

それが変わってしまったのは、やはり1カ月前。ジーンズの男と再び素肌を合わせてから。思い出してしまったのだ。人に触れる心地よさを。

「また会いたい」という気持ちは「いつ終わるんだろう」という不安に、簡単に取って代わる。相手に自分の心をすべて与えてしまいたい、という陽菜の本心と、不安から来るブレーキがバランスを取った結果が、今回のランチデートだ。

(本当は分かってるんだけどなあ)

陽菜の土曜日は、こうして過ぎて行った。



12月4日 日曜日

(あれ、メールくれたんだ)

朝起きて、携帯電話を見た陽菜は、意外な思いでそのメールを開いた。金曜日の合コン相手からだ。

(やっぱり、義理のメールってことね)

楽しく飲んだものの、特に自分を気に掛けている人はいなかったな、という直感の通り「金曜日はありがとう。また飲みに行こう」という特に続きのない内容だった。陽菜はお決まりの「ありがとうメール」を返信して、再び布団に沈んだ。

陽菜が再び布団から離れたのは、昼を過ぎてからだだった。

昨日は一日家の中にいたので、今日こそは外に出たいと思ったがいかんせんお金がない。財布には千二百円。貯金はそれよりも少ない。車は持っていないので、外に出ようとすれば公共交通機関を使うことになる。手持ちの金から交通費を引いてしまつたら、一体何が出来るだろう。

仕方なく部屋の隅に散乱している請求書の明細書類を整理することにした。手に取って見れば、9月のものまである。

(いやあ、なんて言うか、思い切ったお金の使い方してるなあ)

乾いた笑みを浮かべながら、数字を目で追っていく。心機一転を図り、自己啓発に目覚めたこの一年。教材を買い、資格試験に申し込み、クーポンサイトで習い事があれば飛びついた。

(来年は節約と貯金を趣味にしようかな)

陽菜の日曜日は、こうして過ぎて行った。

と、一日が終わりかけた頃、一通のメールが入った。

今朝メールした金曜日の合コンの相手から、食事の誘いだ。

12月5日 月曜日

陽菜は目が覚めた途端、ストンと胸に落ちてきた思いがあった。

（ああ、彼は、彼は、時々泊りに来る“男友達”なんだ）

今日は、最後に会ってから4日目。昨日までは、相手が自分のことをどう思っているのだろうかと散々考えたというのに、何だかそれで納得してしまった。

以前は、自分を大切にしてくれない男に期待しても仕方がない、早く切らなければ、と悶々としていたのが嘘のように、その“男友達”を受け入れてしまった。

セフレ、と呼ぶのかもしれない。

意味は同じかもしれないが、セフレという言葉は使いたくない。

あくまで友達だと思いたいのだ。

（そう思っていれば、彼と会っても普通にしていられそうだが）  
それにしても、自分から連絡するべきなのだろうか。

自分と連絡しなくても相手が平気なのだということが、陽菜は悲しかった。

（恋愛はパワーゲーム、ね）

『ゲームに勝ったものだけが、その恋をゲームするか、本物にするか、選ぶ権利を与えられる』（byジエイク）

昨夜読んだマンガのセリフは、まさに今の自分に対する教訓のようだ。

合コン相手との食事は、お昼。「予定が合えば」ということを前

提とし、それぞれの職場の同僚を伴つての、軽いノリのものだった。

結局、一緒にいた時間は正味30分。

新しい話題はないまま「あの飲み会楽しかったね、また飲みに行こうね」という話に始終した。

夕方にメールが来て、夜に返信をして、次のメールで早々に「おやすみ」という文字が打ち込まれていたことから、そのメールに返すことはしなかった。

ぼつん、と一人の部屋で、何もかもが自分の横を通り過ぎていくような思いにとらわれていた。

12月6日 火曜日

陽菜は携帯電話を手に、たった今送ったばかりのメールを見返していた。たった一言、おはよう、と送った久しぶりのメール。

ぶぶ、と携帯電話が震えた。

見ると、昨夜「おやすみ」とメールを完結させた、合コン相手からだった。

思わずもう一度携帯電話を置いた。しかし、しばらくすると、心が軽くなっていることに気が付いた。期待した相手ではなかったものの、気にかけてくれる人がいるということに、心がほっこりと暖かくなる。

30分後、メールを送った相手からも返信が来た。たった一言送った、何の意味のないメールがその後も続き、夜までメールをした。

終業後、暗い路地を陽菜は家に向かって歩いていった。カツカツとヒールの音が響く。

(好きになった方が、負けか)

今回の恋、あの“男友達”への気持ちは、叶いそうもない。都合のいい相手として思われてもいい。それでも、彼がいることで、もっと色んな人と関わって、もっと色んなことがしたいと思える。

(メールくらいが、一番いい距離なのかもしれない)

陽菜の恋愛経験と言えば、付き合った人数が3人、身体だけで終わった相手は“男友達”も含めて3人。

(付き合った人は、3人ともが向こうからメールしてくれて、電話してくれて)

そのため、自分の方の気持ちが大いときにごう頑張ったらしい

のか分からない。恋愛がパワーゲームなら、一度負けてしまったらそこからどう覆せば逆転出来るのか見当もつかないのだ。

（好きになってくれた3人とも、結局たいして深く関わることもなく、プラトニックなまま終わっちゃったな）

周囲には、恋愛の話題に事欠かないと言われている。しかしその割に、陽菜には恋愛の土台となるものがなかった。そのアンバランスで不安定な価値観を隠したままここまで来てしまったことが、現在の陽菜の弱さに繋がっている。

恋愛が出来ないなら、お見合いでもいい。

それとも、もう一人で生きていく覚悟を決めて、そのための術を身につけることに専念してしまおうか。

（その選択肢も悪くはない）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0945z/>

---

陽菜の一日

2011年12月7日07時49分発行